

第六章 自然と人物

第一節 ふるさとの自然

一 風雪に耐えた名木

それぞれの地域に四季のいろどりを添え、地区民に親しまれている樹木がある。

その地に根をおろし、枝をはって、地域とともにながい風雪にたえた樹木に、地区民はふかい愛着を寄せている。なかには、惜しまれながら枯れたり、やむなく伐られた木もある。そうした樹々を名木として紹介する。

1 財津天満宮のクス

幹の回り（胸高）が六・三メートルで、樹高は二七メートルもある。がっしりと四方へ踏んばった根は高く盛りあがり、太い幹のあちこちに見えるコブ状の突起が、風雪にたえぬいた長い歳月を物語っている。



財津天満宮のクス

下に立って見あげると、圧倒されるような気になる。

残念なことに、平成三年九月の台風一九号で大きな被害をうけた。うっそうとしてあたりを覆っていた大きな枝が、何本も無残に吹き折られてしまった。枝の広がりも前の半分以下になり、まばらになったので、毎年巣づくりをしていたフクロウも来なくなったという。

樹齢は少なく見積っても、数百年を経ていると思われる。ご神木とされているので、天満宮と同じか、それ以上の歴史を重ねているのであろう。

昭和六一年三月に、日田市保存樹（指定第十一号）として指定をうけている。

2 山の神のスギ（小河内町）

小河内町の大神宮のまえにそびえるご神木のスギは、「山の神のスギ」として知られる。花月バイパスの小河内町を通るとき、路傍にすぐ目につく大樹がそれだ。

樹高四一メートル、幹の回り（胸高）四・四メートル、

小河内町 山の神のスギ



樹齢はおよそ四百年といわれている。

このスギのルーツについては、彦山スギと同じ種類で、近郷には類を見ないともいう。小河内を開いた先人が、彦山権現に参詣のおり、神の宿る木として自生の苗か、さし穂をもらい受けてきたのであろうか。

そうだとすると、このご神木の歴史は、小河内開拓の歴史とそのまま重なってくる。

スギは、いまは一本だけになっているが、以前は数本あったものが枯れたり、花月バイパス工事の際に伐られたりしたという。三花地区では、数少ない貴重な大樹である。

昭和六一年三月に、日田市保存樹（指定第十三号）として指定をうけている。

3 伏木のサクラ

伏木町（飯屋）の阿弥陀堂の横で、春には枝いちめんにこぼれるように花をつける。ふつうサクラは短命といわれるが、このサクラは樹齢一五〇年以上とみられ、いまでも変わらず咲きつづけている。

胸高の幹回りは三・五メートルもあり、長い歳月に耐えた、幹のブツブツの粗い肌だけみると、とても、サクラとは思えないほどだ。

どうしたわけか、幹は地上からすぐ北に大きくかたむいて斜めに伸び、枝を広げて

いるのもおもしろい。

大樹だけに、木の下に立って見あげるといろいろと興



伏木のサクラ

趣がわいてくる。花の季節に、サクラの下を訪れた花見客の風俗も、江戸時代から現在まで、実にさまざまであろう。そうした変遷をしのんで眺めると興味が尽きない。

昭和五三年一月に、日田市保存樹（指定第十八号）として指定された。

なお、「カラカサ松」と呼ばれて親しまれていた市の保存樹・伏木の黒松（昭和五六年一二月・指定第十九号）

は、残念なことに平成四年に枯死してしまった。

4 ムクとエノキ

モノの乏しかったころの、むかしの子どもは木の実を好んで食べた。ムクの実もそのひとつで、黒く熟れた実は、種子が大きくて食べられる部分は少ないが、黒砂糖のような甘さがあった。

エノキの実（エノミ）は黄赤色の小粒で、少し渋味のある甘さだった。

三花地区の旧国道沿いには、ムクやエノキの大樹が何本か目につく。

ムクの木では伏木（仮屋）に巨木があり、清水町（成重）にも見られる。

財津町（中村）のムクの古木も、地区の名物のようになっていたが、道路の管理上危険であるということで、昭和六二年八月に惜しくも伐られてしまった。名残の巨大な切り株（回り三・九メートル）が、大きく張った根で、大井手水路をまたぐ異様な形でいまも残っている。



財津のムク切株

エノキでは、財津町（通戸）の大井手井堰いせきのそばの大樹が知られ、清水町（貞清）にも道路沿いに二本の巨木

5 市ノ瀬のムク

市ノ瀬の花月川（右岸）河川敷きにあったムクの大樹は、数百年もの長いあいだ、この地にそびえて枝をはり、地区民に親しまれてきた。

ムクの実をひろい、この木を遊び相手にして育った地域の人にとって、ムクの木は共通の思い出につながる、地区のシンボルでもあった。

花月川の改修工事のため、ムクの大樹が伐られることになったとき、これを惜しむ声が多かったのは当然ともいえる。しかし、平成元年に惜しまれながら伐られてしまった。

いま、ムクの木があった近くの川岸に「愛惜碑」が建っている。

椋大樹愛惜之碑

ここに椋の大樹ありき
花月川改修工事のため



清水町 貞清のエノキ

が百メートルほどはなれて、それぞれ道をおおうように枝を広げている。

江戸時代には、街道の一里塚にエノキを植えたといわれている。この木には、その特徴としてヤドリギが寄生しているのもおもしろい。

これらの木は、数百年の樹齢をかさね、晩秋になるといまでも実を落とすが、もうひろう人もいない。

平成元年これを伐り
愛惜やまずこの碑を建つ

平成3年12月

市ノ瀬地区民



ムク伐採まえのお祓い

愛惜の碑の台座は、伐られたムクの木の切り株をかたどっている。



棕大樹愛惜之碑

6 三和小学校のトウカエデ

三和小学校の校庭にそびえていたトウカエデの大樹が、枯れて伐られてしまった。

トウカエデの樹勢がおとろえ、根の周りの土壌改良をしたとの記事が三和小学校の「育友会だより」にでたのが昭和六二年。しかし、手当てのかいもなく、樹勢はもどらずに三年後の平成二年五月には、惜しまれながら倒されてしまった。

三和小学校が、龍川寺境内から住吉や用松の時代を経て、現在地で開校したのは大正元年一〇月である。そしてトウカエデが植えられたのは、大正八年のようだ。

同年三月に高等科を卒業した廣瀬一雄さん（当時用松・住吉在住）などが、大分県立農林学校（現・日田林工高校）を受験したさい、同校から苗をもらって帰り、当時の校

舎南棟の東の端に記念植樹している。このとき、ほかにアカシアやポプラも植えたという。

三和小学校の卒業生が小学校のころを回顧するとき、



運動会風景とトウカエデ（昭和 50 年）

トウカエデはさまざまな思い出につながる。大正期にはトウカエデの付近に花壇が設けられたといい、昭和の戦時下にはすぐそばに土俵場が建てられ、男の子はここでよく相撲をとった。

このトウカエデは、樹名がわからず無名の時代が長かった。わかったのは昭和五〇年ごろ、当時、日田市博物館協議会委員の浦塚勝さん（故人・財津町）などの調査によるものだ。

以来、三和小学校のシンボルとしてこの大樹への関心が高まり、「育友会だより」のタイトルが「どうかえて」に改められたりした。

トウカエデは、平成二年五月に三和小学校児童の見守るなかで倒され、その一生を終えた。植えた当時の苗が十数年ほどのものとみて、樹齢は約八十数年である。根元の幹回りは約二メートル、樹高は一〇メートルほどであった。

二世の植樹

トウカエデは、三和小学校卒業生の手で二世が育っていた。風に運ばれた種子が、樋口吉典さん（昭和三四年卒・清水町）宅の庭で芽ばえ、五年ほど経っていた。

親木が枯れたあとの平成三年の春、二世は樋口さんと当時の大島三明校長の手で、運動場の東南の隅に植えられた。

そしてもう一本の二世は、十数年まえ、当時小学五年生の今永光則さん（昭和五七年卒・清水町）が、実生の苗を自宅へ運んで育てていたものだ。

この苗も、三和小学校「みどりの少年団」の手で、平

成三年一二月に母樹のあった近くに植えられ、再び子どもたちのなかで育つことになった。



母樹の跡に植えられたトウカエデ二世

二 身近な名勝

1 龍ヶ鼻（龍体山）

龍ヶ鼻は、古くから三花地区の象徴として親しまれている。三和小学校では大正期から遠足場であり、地元



龍ヶ鼻の不動明王

の財津町では、お大師さまの「お接待」の場としても身近な存在だ。

龍体山（高さ三四メートル）の呼び名は、ちよつと改まった感じになるが、いづごろの命名だろうか。龍ヶ鼻を文字どおり頭部の鼻づらとして、東西に長く伸びた台地の形が、ちょうど龍の伏した姿に似ているのでこの名がある。

先端の龍ヶ鼻に立って見おろすと、秋原、市ノ瀬などの花月谷や、藤山、財津、それに三河町（小野地区）が、すぐ眼下に広がり展望が素晴らしい。

戸山もすぐまぢかに望まれる。『太宰管内志』という江戸後期に書かれた本によると、むかし戸山には桜が多かったというが、桜以外の大樹が多くて、桜をおおっているのが花がはつきり見えない、しかし「溪川の西なる龍ヶ鼻よりみるにはさまたぐるものなし」とある。つまり、戸山の桜は龍ヶ鼻から眺めるのが最適というわけで、むかしの有様がしのばれて興味ぶかい。

龍ヶ鼻の愛宕神社は、天明四年（一七八四）に祭られている。その西がわ一帯には、大正一二年に植えこんだという霧島ツツジの古木が連なっている。



龍ヶ鼻の遠望

龍体山八十八ヶ所

龍体山には、もともと古くから石仏が祭られ信仰をあつめていた。大正一一年に、日田郡内の有志によって「龍体山八十八ヶ所」が開山されて以来、多くの参詣者でにぎわいを見せるようになったという。

愛宕神社のそばに、大正一一年に建てられた「龍体山龍ヶ鼻八十八ヶ所創設記念碑」が建っている。このころ、石仏の寄進が競って行われたといい、それぞれに刻まれた寄進の年月を見ると、大正末期となっているものが多い。

石仏は参道わきだけでなく、雑木林のなかにも数多くあり、その数は三百体を越すともいわれている。

「御座石」のちかくの霊場案内図には、一周約一時間とあり、八間岩、針の耳、カサネ岩、愛宕神社、赤岩（梵字）、鞍掛石など、年輩者にはなじみの名が並んでいる。龍ヶ鼻の先端ちかくにある「赤岩」には、大きな梵字^{ぼん}が刻まれている。胎蔵界大日如來の真言（仏への讃仰の呪文）「ア、ビ、ラ、ウン、ケン」の梵字で、刻まれた巨岩そのままが大日如來のお姿とされる。

龍体山の守り本尊として、大正一一年に大がかりな足

場を組んで刻んだという。赤岩は巨岩なので、花月パイパスからもよく見え、双眼鏡でのぞくと五字の梵字まで望むことができる。



赤岩に刻まれた文字

新しい憩^{いこい}の場

龍体山は、昭和六一年、六二年度に日田市が「緑地休養施設」として整備したので、市民の新しい休養の場となった。

道路の整備をはじめ、トリム広場や展望舎、遊歩のための林間歩道なども設けられた。また、これに合わせて、

大分県も「龍体山水源の森」として、面積約三四ヘクタール、既存の樹木も含めて約一万八〇〇〇本の植栽をしている。

古くからの信仰の地として、また市民の新しい憩^{いこい}の場として、龍体山はこれからも長く地区民に親しまれることだろう。

2 養面寺の清水

清水町を通る旧国道の、養面寺橋のそばに薬師堂が建っている。その前の市道を四〇メートルほど上ったところに、古くから知られる名水の清水がわいている。

地元では「いがわ」と呼び、わき出た清水は切り石で長方形に囲まれたなかに、常に五〇センチほどたたえ、余った水は洗い場を通って外へ流れ、小溝^{みぞ}をなしている。

柱に砂鉄水の文字

泉と洗い場の一坪余りを屋根でおおっており、柱に書かれた「大極上砂鉄水」の文字は、薄れて読みとれなくなっている。

いつのころからこの清水がわいたものか、言い伝えも

残っていないのでわからない。しかし、すぐ近くの西の台地に用松古墳があるところから、かなり古くからの存在が裏づけられる。この泉から市道を六〇メートルほど上った地点にも湧水があるので、同じ水脈によるものと思われる。

泉の湧水量は、むかしに比べると減っているといわれるが、それでもかなりの量である。毎年行われる「いがわさらえ」のさい、壮者二人が組んで桶おけでくみ出すが、息をきらしての作業でも、湧水が多いので泉を干してあげるのは難しい。

この清水には、思い出をもつ人が多いようだ。学校の



養面寺の清水

行き帰りなど憩いこいの場でもあった。炎天下に飲む清水は生きかえるように冷たく、先をあらそつてのどを潤した。むかしは手桶おけが備えてあり、手桶を傾けて顔じゅう濡らして飲んだ。

「いがわさらえ」は、毎年七夕たなばたの日に養面寺の地区民総出でおこなうのが恒例になっている。

昭和一五年の日田市誕生のさい、町名を「清水町」としたのは、この名水に由来している。

3 斎藤家の「伝・雪舟の池」

雪舟といえば、室町時代の画僧として名高い。また、名園をつくったことでも知られ、そうしたことから、各地に雪舟の庭という伝承を持つ庭園も多いようだ。日田市内では大鶴（上宮町）の坂本家の庭園が知られているが、天神町（千倉）の斉藤勝己氏宅の「伝・雪舟の池」もそうした伝承をもつて

いる。

ただ、家の建築のさいに、池の一部をこわして石垣を築いており、また、池を分断して農道が通るなどしているので、原形をとどめていない。



斉藤家の「伝・雪舟の池」

中央に亀島

池は、幅八メートル、長さ二メートルほどのほぼだえん形をしている。中央に西向きの亀島があり、その島の頭部に、亀頭石から一メートルほど西がわに離れて水中にポツンと高さ一メートル、幅四〇センチほどの、やや先細りのりっぱな立石があり、印象的である。

池の護岸の石組みには、かなりの技法が見られるというが、なにぶん庭や道路をつくるためにこわされ、組直しているところが多いのは残念だ。

池の東のすみには、ツツジの古木が池をおおいかくすように茂っており、池の東のすみの石垣の下には、一メートル四方の湧水の井戸らしいものも見える。

雪舟がつくったものか、その真偽のほどはわからないが、そうした伝承をもつほど古い池であることは確かだろう。いまの形のままで、ぜひ長く残したいものである。

4 底霧の展望

朝霧の ほのかに霽^はれて
青き山 繞^{めぐ}るところ

― 日田市歌 ―

日田市歌にもうたわれるように、日田は霧の多いことで知られる。霧はとくに秋から冬にかけての期間に多い。霧のふかい日は、快晴になることが多い。日田盆地をすつぽりとおおうこの霧は、きわめて特異なもので、むかしから「日田の底霧」と呼ばれている。

底霧の展望は、とうぜん高いところからがよい。伏木は海拔四〇〇メートル余の高地だから、ここから眺める底霧は素晴らしい。県道（七二〇号線）の「坂ノ辻」から下った付近から見おろすと、眼下に広がる底霧の風景は湖水を見るようであったが、最近植林されたスギが伸びてきて、展望がきかなくなっている。

花月地区では、ほかに秋原町の台の集落へ向かう市道の途中からも眺めることができる。



底霧の展望（龍体山から）

龍体山から最適

いま、底霧を眺めるのに最適のところは龍体山だ。高さは約三〇〇メートル。山頂一帯や道路もともに整備され、財津町の「農協三花支所」のまえから、車なら数分で山頂に着く。

展望台からの眺めは、盆地の底をおおう霧が湖水の風景を思わせる。日隈、月隈、星隈などが島影のように浮かび、突きてた台地が半島のように見える。霧は時間の経過につれてたえず流れ、濃く淡く、ときにはうずを巻く。

こうした底霧の風景は、だれでもカメラで撮ってみたくなる。しかし、底霧の撮影は容易でないようだ。霧の朝をねらっても、天候しだいなので霧がでるとは限らない。霧がでて朝の早い時刻では一面の霧で絵にならない。カメラマンは早い時刻から根気よく待って、霧がしだいに流れ、湖水にも似た風景となるシャッターチャンスをねらうという。

5 立花邸と水路

水路をあふれて流れ落ちる水と、白い土堀に土蔵ふうの建物――。日田の観光ポスターにも使われ、すっかりなじみになった風景である。いかにも水郷らしい立花邸の風景が日田観光のPRに使われ出したのは、昭和四〇年代である。

そのころ、ここを通りかかった印刷会社のカメラマンが、絵になると見てカメラを構えたのが最初だという。見なれた者にはなんでもない風景だが、一目でそれと見抜いたのはさすがにプロのカメラマンだ。

薬師寺の管主も来訪

以来、日田を紹介するテレビ番組のカットになったり、カレンダールの風景写真で使われたりして、すっかり有名になった。

水路をおおように古木の梅が咲き、サルスベリが花をつけるので、花の季節になると三脚つきのカメラでぞいている人をよく見かける。

奈良薬師寺の高田好胤管主が日田を訪れたとき、ここ

に案内されたことがあるそうだ。かたわらにある薬師堂に目をとめられ、付近の人に、薬師如来を拝むとき、御真言はなんと唱えているか聞かれたとの話も残っている。

むかしの面影を残す土蔵ふうの建物は、「かずらや」と呼ばれるこの家のあきなう竹の皮や椎茸など、林産物の収蔵庫として使われたものだ。また、水のおふれている水路は、いぜ（井手）と呼ばれ、すぐ下流にあった「からうす」（水車）への導水路で、昭和三〇年代ごろまでは付近の子どもたちの水浴びの場でもあった。



ウメの咲く立花邸と水路

第二節 世につくした人々

一 菅 樵禪

文化一五年（文政元年、一八一八）四月一日、菅竜測の名前で、咸宜園に入門した。三花からは、最も早い入門者。

竜測は英彦山の修験僧だったが、羽野の菅相寺が、禅の修学に適しているということで、日田に来ていたのである。

しかし入門後数ヶ月で、七月には、月旦表の客席に移っている。聴講生というわけだ。

日田を去ってから、禅宗の名僧として、伊豫大洲の竜護山に住して、曹溪院となり、またその後、京の妙心寺長老となった。

樵禪は、入門期間は短かったが、師広瀬淡窓を深く敬愛し、機会あるごとに訪問して、慰めた。

淡窓も、樵禪のことを

門生中ノ大ニ^{おい}発達セル者

と称揚し、彼が紫衣を賜ったときには、

釈樵禪、去年上洛シ。紫衣ヲ賜ハリ、大和尚位ニ任ズ。

と喜んでいる。

四国からの

入門には、樵禪の紹介が寄与するところが、多かったといわれる。

樵禪の書は、大分の方に残っているものが多い、意気の高い名書とされている。

彼の紹介で、すぐ続いて咸宜園に入門し



菅樵禪の住んだ羽野天満宮の、菅相寺跡

た修験僧、役豊記は、後に宰相と改名して、羽野妙見社の社僧となっている。

二 菅野兼之

正確な日付はわからないが、若くして咸宜園に入門、広瀬青村、林外に学んだ。

後、肥前に行つて、易学を学び、日田に帰つてから、父の後を継いで、羽野天満宮神官となった。

一方、子どもたちを集めて教え、住吉学校が開設されてからは、教師となり、一七年間にわたつて、教育のことに従つた。

兼之は性格が寛容だったが、曲つたことは決してしなかった。しかも父母にはよく仕え、かつて、父が彦山に登つて病氣になった、と聞いて、大雪の中、ひとの止めるのも振り切つて、登山し、心を尽くして看病に当たつた。

明治一九年、長男の兼太郎も、咸宜園に入門、また父の教職を継いだ。

明治二七年（一八九四）八月二五日、病氣のため死去、

行年六〇

七年忌の後、教えを受けた人々が、謀つて、明治三四年（一九〇一）八月、「菅野先生之碑」を、羽野天満宮横に建てた。題字は東京女子高等師範学校長・秋月新太郎、文は長男兼太郎、書は太宰府の画家・吉嗣拝山である。

菅野氏の跡は、現に大分にお住まいとのことである。

三 高取成章

幼名は守、後に文吾、また成章。

弘化元年（一八四四）一〇月二〇日、用松照妙寺恵妙の長男に生まれた。

安政四年（一八五七）二月一八日、釈惠実の名で、一四歳で咸宜園に入門、広瀬青村に学んで、都講となった。退塾のあと、柳川の真宗大谷学寮で、仏教の学問を積む。

しかし、寺は継がずに、官吏の途につく。

明治二年（一八六九）、日田県が設置されて、史生に登用。翌年の竹槍騒動では、命ぜられて、長信成、高橋敬一らの県吏とともに鎮庄に努力したが、成功しなかった。

日田県の廃止とともに大分県にうつり、明治五年（一八七二）正月、権小属、七月に小属、明治一〇年の官制改革で、六等属となる。

この間、公文書の起草にあたり、明治初年の大分県政文書を収録した『県治概略』の編纂に従ったりしている。

明治一四年（一八八一）には長崎県に転じ、同一六年佐賀県へ、さらに同一九年に、再び長崎県に戻って、累進を重ねる。

明治三十一年（一八九八）長年の官吏生活に、終止符をうち、日田に帰郷、悠々自適の日を送っていた。

ところが、明治三五年（一九〇二）二月、請われて、下毛郡三郷村長となつて、村政に精進のうち、九月二七



高取兄弟所縁の照妙寺

日、任地で病没した。行年五九。

成章は、人柄が温く、自分のためより、人のためによく尽くした。官吏としても、慕われ、頼りにされた、という。

彼が若い頃に書いた布告が、大分県資料として残っているが、文章が巧みである。

また詩もよくしたことが知られている。

四 高取悦堂

名は益多。号が悦堂である。

嘉永六年（一八五三）六月一五日誕生。さきの高取成章の、弟である。

文久三年（一八六三）九月一八日、釈謙州の名で、兄成章の紹介により、咸宜園入門。一一歳だった。

三〇歳を越えて、司法官を志し、判事登用試験に合格した。鹿児島、長崎県下各地などの裁判所判事を歴任して、明治三十六年（一九〇三）三月二四日退官。

日田に帰って、弁護士を開業しながら、後進を育成、また淡窓全集の出版について、献身的に編纂に当り、淡窓の顕彰に努めた。

昭和六年（一九三二）二月一八日、病のため没した。行年七九。

法名、覺是院釈悦堂居士

昭和七年末、友人知己等によって、城町西光寺に、墓碑が建立されている。

悦堂は、自らを持すること高潔、清廉で、古武士のような風格があった、という。

詩作を楽しんで、数多くの詩を詠んでいる。

日田に悦堂の書を所有している人は多いが、広瀬青椰の筆に似た、すっきりとさわやかな書風である。

五 刀鍛治―山上国隆ほか

森春樹という、江戸末期の日田の国文学者が、その著書『亀山鈔』の中で、次のように云っている。

室町時代の中頃、「豊州日田住盛達作」と銘を切った刀があるそうだが、盛達ば盛匡の誤りと思われる。盛匡

は金剛兵衛という名刀工の一族で、隈の裏河原か、羽野村に住んでいた、ということである。

また山田氏が「豊州日田住盛重」とある刀を、手に入れたそうだが、これも金剛兵衛系の作りである――と。

この春樹の説は、たいへん興味深い。

しかし現在は、これを証するに足る根拠は、全く見出されていないので、真疑のほどは確かめようがない。

ところで、このほかに刀鍛治が日田にいたことは、確実な証拠がある。

「豊後日田住紀定行作、天保三年辰八月」

の銘の刀が、現存する。定行は姓がわからないが豆田にいた人。

また寛文の頃に、森藩領、西有田札町あたりに山上播磨守国隆という刀工があって、銘を入れた刀を残している。その子孫、七代目の播磨守国寿が、文化の頃に出ている。

その後嗣は、羽野村に移り、現在も天神町に居住しておられるが、鍛治ではない。

山上家は野鍛治の傍ら、刀をうっていたのだが、国寿に学んだのが、西有田にいた合原助三という人。

さらにこの助三に学んだのが、樋口兼松。兼松は玖珠から天神町に養子に来て、野鍛冶をしながら、刀も打った。太平洋戦争中は刀の需要も多く、店先で刀を研いでいる姿が見られた。戦後はもちろん刀剣の所持すら許されず、昭和三〇年頃店を閉じて、山国町へ移った。職人氣質の人で、長刀よりも短刀が得意だった、という。

後嗣は山国に居住する由。

用松には、豆田の刀工本庄国行氏の弟子だった浦塚白^{あき}秀^{ひで}という刀工もあったようで、無銘だが、作刀がある。

六 宮川文一郎、梅子

終戦時まで三花で唯一の医院の開祖は、羽野の横尾忠右衛門に招かれて開業した、蘭法医の宮川葛民であった。その長子が宮川文一郎である。済生学舎を出て父の後を継いで、病院を博愛館といった。

文一郎は日田ではじめて近代外科手術を行なった。林工学校の校医となり、豆田、石井、小淵にも分院を置いた。

殊にトラホームの治療に意を注いだので、地区にはト

ラホームの子どもはひとりもいなかった、という。身体も大きかったが、性格も豪放だった。最初は馬に乗って往診していたが、やがて駕籠になり、人力車になった。ある時雇い車夫が酒に酔って俥を引っくり返し、泥だらけになったことがあるそうだ。

文一郎は六二才で死去した。その後は三女の宮川梅子が継いだ。日田はじめての女医だった。

梅子は父が女医吉岡弥生と同級だった縁故で、その吉岡の創設した東京女子医専に学んだ、専門は小児科だっ



日田の女医の草分け 宮川梅子

だが、父の後継となれば外科手術もしなければならなかった。女の子の髪しづみの虱取りも、よくしてやった。母と夜おそくまで薬を調合していたという。

若いときから小肥りだったので、手が柔らかくやさしい。その手で診察されるから、年寄りも子どもも喜んだ。冗談など口にしないう生真面目一方で、人々の信頼を寄せられていた。

遠くへは人力車を使って往診したが、山田あたりへは、ズツクの靴を作って履き、肥えた体を杖に託して歩いた。俳句が好きで、伏木往診のとき峠で一休みして詠んだ句がある。

ある夜半、山田に往診を頼まれて、風邪の熱をおして出て、肺炎を起こした。そして昭和七年七月一日死去、行年二九だった。

梅子は弟宮川泰孝の希望を入れて、東京美術学校へ進ませた。泰孝は姉の死後、帰郷して教員となり、小・中学校長を歴任の後、日田市教育長を勤めた。

堂々たる体軀で剣道をおさめ、宮本武蔵の二天一流を継いだ。また絵も油絵、クレパス画、水墨画と行くところ可ならざるはなく、東京に残っていたら画壇に名を成

していたらうといわれる。

両人の長姉宮川松子は日田中学の最初の女教師。

文一郎の弟宮川章二郎は、咸宜園出身の写真術の開祖、上野彦馬に学んで、羽野で開業。はじめは出張撮影をしていたが、後、豆田に宮川写真館を創めた。